

俳句の中の夢（三）

池田亮二

夢によく似たる夢哉墓参り 嵐雪

夢に似た夢って何か？ 夢なのか夢でないのか。夢の中の夢というならわかります。A子にふられた夢を見て、覚めたら隣りにB子がいて誰の夢を見てたのとなじられ、更に目が覚めたら古女房が睨んでいた、というような。だが、夢に似た夢とは何なのか。半分夢で、半分現ということか。半分呆けた人間の思いのようなものか。嵐雪は武士を捨て、妻とも別れて仏門に入り、ほとんど人と交わることなく過したという。親しい人の子が思いがけなく亡くなり、逆縁を悲しむ多くの人が嘆く中で詠んだ句ということです。あの子はほんとうに亡くなったのか、まだ生きているのではないかというような悲痛な思いを、夢に似た夢と詠んだのでしょうか。同じように早逝した子を弔う句に

夢となりし骸骨踊る萩の声 其角

がありました。楽天家の其角と世捨て人の嵐雪の内面の違いがくっきりしている。其角の夢は骸骨さえも楽しげです。

初夢に猫も不二見る寝様(よう)かな 一茶

猫も夢を見るようです。この国ではいい夢のトップは何ととっても富士の山で、猫は贅沢にもその富士の夢を見ている。富士山を仰ぎ見るには四つん這いではよく見えない。それで猫独特のばんざいポーズで寝ているのでしょうか。さすが一茶宗匠よく観察しています。

花鳥もおもへば夢の一字かな 成美

源氏物語を読み終えて、とあります。光の君、薫らをめぐる数多くの女性との華やかでやがて哀しい恋の長大な物語を総括すると、ただ一場の「夢」に尽きるとする。「夢」は「無」に通ずるか。いささか坊さんの説教めいて、俳句としてはもう少し、もののあわれの余韻を残してほしい気がします。成美は、江戸蔵前

の札差の当主ですが、病弱を理由に早々と家を弟に譲って隠居し、枯淡な俳人生活に入ったのに、その弟が夭逝してしまったので、仕方なくしぶしぶ生涯、大旦那をしなければならなかった。

売てやる夢さへも見ず冬ごもり 成美

今の世代にはわからない句かと思います。金子みすゞに「夢売り」という美しい詩があることから、大正の頃までは夢が売られていたようです。宝船に七福神が乗った絵を正月二日の夜、枕の下に敷いて寝るといい初夢が見られ、その一年よいことがあるといわれ、宝船売りが「おたからおたから」と言いながら売り歩いた。だけどやはりこの夢絵にも、宝くじと同様に当たりはずれがあるので、成美さん、せっかくいい夢を見ようと宝船の絵を買って寝たのに何の夢も見なかったもので、がっかりして冬ごもりするしかなかったようです。

現代人は、いい夢でも悪い夢でも覚めればすぐ忘れてしまうようだけれど、昔はいい夢を見れば現実にもいいことがあり、悪い夢は良くないことにつながると考えていたのです。夢は一種の予知機能をもっていると思われていたようです。成美さんが見たかったいい夢は、商売繁盛の夢か、浮世離れの俳人の風流世界だったのかは知る由もありませんが。